

曲直瀬道三の本姓を検証する

——堀部氏あるいは勝部氏か——

葉山美知子

京都医学史研究会

激動の16世紀日本を丸々生き抜いた我が国屈指の名医・曲直瀬道三(1507-1594)の本姓について検証してみる。道三研究は、現在なお様々な観点からなされているが、いずれも道三の本姓は「堀部正盛」であることをほぼ定説にしている。従って本姓について論じられることは稀である。これはひとえに江戸幕府が各家の家譜系譜を差し出すことを命じて作成した諸家譜の信頼度にある。とりわけ文化年間(1804-1807)に成立した『寛政重修諸家譜 第十』に記載された系譜は信憑性が高いとされ、研究者はこの系譜を前置きにして自論を展開していく。即ち道三とは「宇多源氏にして佐々木左近将監成頼の後裔馬淵左衛門尉廣貞が三男堀部左近大夫成綱が八代を左門親眞とし、其男を正盛とす。正盛正紹まで曲直瀬を称し…」であり、本姓は「堀部正盛」と明記される。

さて道三の本姓調査にあたり基本資料は上記の(1)「諸家譜」と(2)『當流醫之源委』、(3)『今大路家記鈔』、(4)『啓迪集』道三自序(1574年)である。(1)の『諸家譜』に明記された道三の本姓「堀部」は、(2)(3)いずれにも記載がない。道三の父母について法名が父「元眞」、母「妙桂」の条でも姓は示さず生没年を記すのみである。また道三の誕生時に相ついで父母を亡くした後、(2)では8歳で近江守山の大光寺に入り13歳で都、相国寺藏集軒の喝食になるというが、(1)は大光寺入りではなく10歳で相国寺に入るといふ。その後、22歳で足利へ遊学、以降の年譜はどの資料もほぼ一致している。また母の出自は近江蒲生郡の目賀田氏で、目賀田城主綱清の姉(娘説は不可)という具体的な人物を特定できるが、父の出自は六角佐々木庶流・堀部左近大夫成綱からとんで8代のちの「左門親眞」である。成綱は鎌倉初頭に在世、息子の泰信も1252年4月、左衛門尉として鎌倉で要人を供奉していることが『吾妻鏡』にあるとはいえ数代の空白がある。これだけでは道三の父・親眞(1473-1507)が、姓は堀部、名は成綱、位階は従五位下左近大夫の8代後の子孫とは言い難い。

一方、堀部説に異を唱える史料がある。滋賀県栗太郡役所編纂『近江栗田郡志』の「人物志」で道三を「従来京都の人と伝へらるゝは門戸を京都に張りしによれり、道三は永正三年當郡勝部村勝部氏に生る、勝部氏は佐々木氏の支流なり、名は正慶……略……」と記す。系図も付記され、佐々木信綱4代の孫・左衛門尉頼信以降、勝部氏を称すというが、頼有・頼冬の後裔が空白で道三父まで届かない。また「野洲町史」も道三は佐々木庶流・守山勝部氏の出身と記しているがこれとて裏付けがない。興味深い資料としては、『淡海温故録』に勝部神社(大明神)の社蔵文書が収載されているが、御神記に勝部大明神の「延徳明應の動亂の刻當社御炎上あり……明應六年佐々木大膳大夫殿より御再興あり勝部左近大夫と三上越前守の兩人奉行人として御建立成候事……」という顛末が記されている。明應6年(1497年)に六角佐々木高頼(1444-1520)が近江騒動で炎上した宝殿を再興奉納し、その施業を勝部左近大夫重秀たちが執りおこなったという。1497年は道三父は25歳。勝部説にたてば父左門(左衛門)親眞は、勝部神社宝殿遷宮を勝部一族として都から供奉役に招集されていたという仮説もたてられる。堀部説、勝部説、いずれの説にもいま一度あらたな検討がなされてよいのではないか。

結び：戦国時代に生きた道三の出自はその生涯全貌に深く関わる基軸である。先祖の系譜・出生にまつわる父母の死、幼少時の喝食生活・青年期の青雲の志と遊学・医学との出会い・40にして惑わず、都に戻り還俗。本姓ではない呼称曲直瀬で醫道に邁進・『啓迪集』刊行で天皇御覧の僥倖・洗礼名ペルシオールという選択・最後に遺したものは上京十念寺の墓石に刻まれたわずか9寸丈の「一溪道三居士」6文字。